

# フーテン人生

## 無邪気な

### 視点

#03

## 見極めたい過疎の真実

毎年夏休みに東京から遊びに行っていた小学生の筆者は、同年代の従兄妹たちと山野を走り回り、川遊びをし、彼らの登校日には一緒に学校に行つて、地元の子供たちと一緒にプールのプールで遊んでいた。

真夏の日差しを浴びてキラキラ光る用水路には小魚が流れに逆らつて泳いでいる。幅1mあまりの用水路には各戸の玄関先だけに石板が渡され、四畳から六畳程度の土間に続いていく。土間と畳部屋との境は縁側。お使用で訪れた近所の人たちや郵便配達人は、家人に促されると縁に腰かけて冷たいお茶やカルピスを啜り、涼を取っていた。

これは京都の街中ではなく、拙父の育つた秋田県横手城下の街中で昭和40年代後半に見掛けた光景である。母方は商家だったので、親類筋ではこのような場面をよく目にしたが、今ではこのような造りの家はほとんどないそうだ。大半の水路も暗渠になっている。

父方の本家は農家だったので、父は10人兄弟の8番目だったので、戦中は兵士、戦後は都市労働力として、その家を離れることになった。長男以外の多くが故郷を離れる。この人口流失は人口減少の要因のひとつだろう。地元に残つてリング園などの農家を営んできた伯父家族もいたが、今となつては高齢の伯父たちが維持するのは家庭菜園程度である。茅葺の本家と巨大な土蔵を囲んでいた広大な田畑は、なぜか生産の用を終え、いつしか大きな建物やプレハブ住宅地となり、横手盆地の景観を緑から白へと変えてしまった。

今夏は所用があつて、35年ぶりに父母の故郷に行つてみたのだが、街中の景色も人の流れも完全に変わつていた。商店街と共存していた中規模量販店はもはや街中になく、大駐車場付き大型量販店が、かつて田んぼだった地域に連なつていた。19

70年当時の人口は13万人くらい、2010年には9万8000人前後とは25%の人口流失で、田畑と緑は減る一方で、住居や倉庫などの建物が増えていた。スイスや英国だったら、農地がこれほど変わるのには100年以上掛かる。生産地はこの国でも重要なので、おいそれと利用法は変えられないのだ。

一方で、変わらないものも見つけた。北上市から横手市に渡つて東西を結ぶJR北上線沿いの自然景観は40年前とほとんど変わっていない。この自然景観が保たれているのは過疎の逆説的な効果ではないか、と思うのと同時に、過疎の中にこそ、まだ我々の気付いていない、あるいはまだ資産価値化や財政価値化されていない地域資源が隠されているのではないかと考えた。あるいは、過疎になつたことで、営々と日本の農業を支えてきたその土地の独自性や特色にあらためて気付かされる機会ではないのか。農業に後継者がいないといつても、職を求めているのに得られない人々もいるし、農業を支持したい人も多い。自然自体は食料資源にもなるし、共存の思想は食

料資源の維持やマイナーサブシステムという本来的な学習効果ももたらす教育資源になりうる。ただし、よく見れば放棄農地もあつたし、廃棄物の不当投棄も見掛けたり。自然を放つておくだけでは、あまりいい方向には向かないと推し量られるだけに、過疎化が進んでもここに棲み続ける人々、たまに訪れる我々の将来、そして自然環境と資源確保、ひいては日本の農業のために、この土地の魅力を引き出す英知が求められているのだろう。

過疎はどこかに向かう過程のひとつであつて、必ずしも悪いことばかりではないようにも思えた。なにしろ、世界中を見てきたフーテンには、過疎化した日本でも、欧州の街よりもなお豊かに見えるのだから。

### マック木下

世界を過ぎる国際線に育ち過ぎた50代。1980年代から主に英国に住み、英人が本名をちゃんと発音できなかったの、いつしかマックに。ジャンルは無節操など。専門は日英関係史とロンドンの歴史散歩。寄稿先は『英国特集』『R.S.V.P.』『Quality Britain』『Taste of Britain』『未来教室』『ばんじゅーるレマン』のほかミニコミや会員誌など。